

学校活性のトピ

今日と明日の活力をもちます創意工夫

三重県立上野高校

テスト結果の自己分析を基に 自らの課題を把握させ

家庭学習の重要性を実感

一つの高校でも、学年ごとに個性が異なる。しかし、同じ高校を志望し入学してきた生徒である以上、教師が違和感を抱くほど学年全体の雰囲気や例年と異なることは稀ではないだろう。だが、2年前、三重県立上野高校では、そんな異様な状況にぶつかっていたと言つ。「違つた学校のように感じた」と小林誠司先生は語る。

初めはただ違和感としか表せなかったが、徐々に「子供っぽい」「論理的に考えられない」など、例年の生徒との違いがはつきりしてきた。学力面に関しては「平均学力が低いのでは」と感じる教師が多かった。それが明確に数字で示されたのは、1年次の8月に行った模試だった。この頃から、教師は危機感を募らせたと言つ。

課題は家庭学習の改善

「模試の結果を見てみると、比較的新しく勉強した単元は点が取れていましたが、高校に入つてすぐに習つた単元の点数が悪かつたんです。時間が経過すればするだけ、その分記憶があやふやになっている。知識の定着が悪いという傾向が見て取れました」と、森田裕之先生は話す。知識の定着が悪いのは、十分な家庭学習時間が取られていないせいだと、教師たちは考えた。しかも、問題は家庭学習時間の少なさだけではなかった。北村朋美先生は、次のように語る。「英語の授業で、『予習をできなさい』と指示をしても、きちんと予習できる生徒は少数でした。多くが欄外に書き出してある新出単語の

意味を調べるだけ。自分はこの部分が理解できていないのかも分からないという状況でした」中学の時に塾に通い、そこで言われたことだけをこなすという学習方法しか知らない生徒が多かつたようだ。そのため、自分なりの方法を考えて家庭学習を行うことができなかった。

「1年次は、そのときそのときに現れた課題に対応するだけで精一杯でした。例えば、予習の仕方が分からなければやり方を説明し、中学で習つた内容が身に付いていなければ、中学の内容に戻つて授業を実施しました」（小林先生）「しかし、そんな対症療法的指導だけでは十分ではないかと感じるようになりました」

家庭学習状況を把握

そう語るのは、現3学年学年主任の宮井正治先生。学年団は、各教科指導を充実させることに加え、家庭学習はどのような形でやっているかなど、日常の勉強にまで踏み込んだ指導を学年を挙げて行う必要があると考えた。それによつて、生徒の家庭学習時間を増やし、自分なりの方法で学習に取り組み姿勢を身に付けさせようというわけだ。そこで、2年次から導入されたのが、「スタディーサポート」であった。

「スタディーサポート」は、国語、数学、英語の3教科の基礎を測るテストの実施と質問事項

に答えることによつて、学力と学習状況を調査するシステムである。個人の弱点分野などが詳細に分析されたデータを得られるのが特徴だ。

『スタディーサポート』の結果が出たら、ただ返すだけではなく、LHRでそのデータからどんなことが読み取れ、今後どのような学習が必要なのかなどを説明しました」（森田先生）

データでは成績上昇者と下降者の家庭学習時間なども比較されている。「成績上昇者と下降者では、予習を行う割合は上昇者の方が高い。だから、英語の成績を上げるには予習が必要」と、具体的なデータを示しながら、家庭学習時間を増やす必要性を生徒に伝えていった。

また、自分なりに分析し、今後の目標を書くという作業を生徒に行わせたのも、同校の指導のポイントと言える。具体的には、今後1か月の短期と1学期の長期の計画を立てさせ回収。

小林誠司

教職歴10年。本校に赴任して7年目。第3学年クラス担任。昨年度にひき続き進路担当。担当教科は数学。モットーは「授業は厳しく、本ムルムは温かく」



北村朋美

教職歴6年。本校に赴任して4年目。第3学年クラス担任。同学年の小論文指導担当。英語担当。生徒と同じ視点に立って、たくさん話を聞いていきたいです。



教師が生徒一人ひとりが書いたものに目を通し、コメントを付けて生徒に返却した。「生徒の書いたことに対しては、教師がコメントを返すようにしています。最近、生徒がコメント欄で教師に気軽にアドバイスを求めてくるようになりました。最初はただ『頑張ります』という内容が多かつたのですが、『どうしてこの分野が苦手なんですが、どのような勉強をすればいいんでしょうか』など、より具体的な勉強法にまで踏み込んで考えていることがうかがえるコメントが増えました」（北村先生）

ここで身に付けたデータの見方やそれを勉強法に還元する方法は、模試にも十分応用できる。同校では模試の結果が返つてくると、その分析を行う時間を設け、生徒に家庭学習を見直す機会をできるだけ多く作り、その度に計画表を提出させ、教師が生徒の学習状況を把握している。

また、「スタディーサポート」は、教師が授業を再考する材料としても役立っているという。「データをみると、テスト後の復習をしない生徒が多かつた。それまでテスト明けの授業は、すぐ教科書を進めていたんですが、今はテストの解説を行う時間に当てています」（小林先生）

進路観の育成も重視

生徒が家庭学習をしっかりと行えるようになり、さらに将来の目標を持つことができれば、勉強する目的も明確になり、学習意欲も維持できる。そのため、同校では「進路学習ノート」を導入して、計画的な進路学習にも力を入れた。

「2年次には、職業研究、オープンキャンパスへの参加、職場訪問など、生徒の進路意識を高める取り組みを行いました。保護者に協力を仰ぎ、なぜ、その職業に就いたのか、などについて書いてもらい、『職業体験談集』も作成しました。これを読んで、生徒は将来を現実として実感できたようです。また、論理的思考力が欠けていたので、小論文指導にも力を入れました。週1回の進路SHRで時事問題を取り上げ、長期休暇には小論文を課題としました」（小林先生）

「現3年生に対しては、考えられる取り組みはすべて行いました」と小林先生は語る。その成果は、徐々に現れているようだ。

「二極化していた学年全体の学力分布が、2年次3月に受けた模試ではようやく一つの山の形になってきました」（宮井先生）

2年次に行った様々な取り組みが、それぞれに成果を生みつつある上野高校。それらの成果がさらなる相乗効果を生む日も近いだろう。

三重県立上野高校

1899年創立。共学の普通科高校。全校生徒数は1117名。80年度入試では東京大、京都大をはじめ、三重大21名、大阪市立大6名など国公立大に合計109名が合格。私立大にも立命館大36名、関西大36名、早稲田大8名など多数の合格者を輩出。部活動はサッカー部、キッカー部、ソフトボール部などが全国大会に出場経験を持つ。